

プログラム科学論から提案された存在論的展開の意味

千里金蘭大学短期大学部 三石博行

はじめに（お断り・自己弁護）

- この学会に始めて発表したとき「ポスト現象学」などというとんでもないことを言ってしまった。それは今から考えて、私の主観的な自己批判の何者でもなかった。つまり、私は哲学を始めたとき解決しなければならない課題として「自己批判」があった。その自己批判はそれまでに私が関わってきた社会運動や科学技術論に対する課題から生じていたものであった。その課題と向き合うために哲学研究を選んだ。そして、たどり着いた地平が「反省学としての哲学」であった。つまり、哲学は「存在論」や存在論的「認識論」を課題にするのでなく、また、反省的認識論か反省的主体存在論を課題にすることであると考えた。この課題は、哲学の存在理由は、生活世界的、科学技術的ドグマの批判者としても。その点検者として存在することであると帰結した。
- そのことは、逆に私にとって哲学の終焉を意味した。つまり、哲学の存在理由が科学批判や生活世界の意識批判であるなら、その科学的公理や生活世界の意識構造の存在前提がない限り、哲学の存在理由がないからである。そして、もし哲学が存在し続けるなら、そこに生活世界と科学技術のドグマが存在することが前提条件となっていることに気付いた。そこから、科学哲学を科学理論の哲学的な解釈学ではなく、新たな科学理論の萌芽、科学基礎論として位置づける運動は可能かという課題として考えていた。そのことは、哲学研究者として禁止されている科学研究への素人のチョッカイ行為をすることを意味していた。つまり、哲学の歴史的研究ではなく、具体的な社会学や人間学の研究に頭を突っ込み、その解決を課題にしながら、科学哲学を考えるという、哲学的には禁断の行為をしなければならないように思えた。しかし、どの場合に置いても、具体的な人間社会学の領域に踏み込んだとしても、その具体性に圧倒され、また倦怠しながら、哲学的な理論作業に戻るのである。これまで、認知科学、システム論、精神分析学、言語学、生活文化情報論、生活学の課題に取り組みながらも、結果的には、それらの科学の中で、どっしりと骨を埋める覚悟もなく、それらの科学の中に新しい解釈理論を提案する作業に終始してきた。
- フロイトのシステム論的解釈とシステム認識論の提案、言語表現の形成過程のシステム論的精神分析からの解釈とシステム言語学の提案、生活資源の形成過程のシステム論的解釈と設計科学としての生活学の提案等の作業である。それらの作業は、反省学としての哲学の第一公理が、非反省的存在者としての反省的存在者の実存形態という逆説によって成立していることから、始まったものである。

- 2001年度社会・経済システム学会で、吉田民人先生と共に大会基調討論会の一人のパネラーとしてシステム論を問い直す課題に参加したとき、吉田プログラム科学論を理解する機会を得た。その理論は衝撃的であった。システム論の目指す方向を的確に示していた。
- しかし、吉田民人のプログラム科学論は「存在論」を前提にして成立している事に気付く。つまり、そこには長年、70年代から科学批判の哲学運動をして来た自らの哲学研究者としての立場を問いかける課題が横たわっていた。その課題は古い哲学用語としてその呪縛から開放された筈の今までの活動を否定するものであった。つまり「実在」という形而上学的な概念を前提にした存在論を認証する訳には行かないのである。そのため、吉田民人のプログラム科学論を批判し点検しなければならなかった。その点検は、吉田先生の誠意ある対応によって、吉田先生と個人的な研究討論活動が可能になり、論文解釈だけではなく、吉田ゼミ生としてプログラム科学論を学ぶ機会を得た。
- 現象学的な科学批判を前提にしている以上、形而上学的存在論の亡霊を復活させる訳にはゆかない。しかし、文理横断型科学の基礎理論、科学哲学としての役割を主張するプログラム科学論を展開するために、社会学や工学系の研究者にとって常識であり、また研究課題の前提条件となる「自然的、社会的実在」である存在論の課題を語らないわけにはゆかない。それらの存在形態が主観世界・共同主観世界の現れであるという解釈で落ち着くわけにはゆかない。
- 最も避けてきた、伝統的存在論の再解釈を試みるために、その先端批判者であり先 endpoint 検者である現象学研究者に対して問題を投げかける行為を思いつき、2年前から「ポスト現象学」という挑発的なタイトルで発表を繰り返した。今回は、発表者の理論を点検してもらいたいことが、この発表意思の真意であり、その目的である。
- まず、大雑把に、存在論の発達歴史段階を解釈し、その上で、プログラム科学論が提起する存在論の歴史的な経過からの解釈を試みる。

形而上学的存在論、現象学的存在論、へ

- 存在論の発展を歴史的な三つの段階を導入して、それぞれの段階での存在論の位置づけを行う。最初の段階は、存在論が形而上学の課題として西洋哲学の重要な部分を担っていた段階である。この段階をここでは形而上学的存在論の時代と呼ぶことにする。第二の段階は、哲学が自然存在の探求、自然学を科学に委ねた時代から始まった存在論で、人間存在をもっぱら哲学的存在論の課題に限定した時代である。この時代は現在の現象学研究における存在論への視点に置いても継承されており、現在の現象学的存在論の主流を成す。さらに、最後に第三の段階は、オートポエジース・生命系の自己組織システム論、ルーマン社会学に潜伏内蔵され、吉田民人のプログラム科学論で顕在展開している進化論的存在論である。この第三段階の存在論をプログラム科学論的存在論（進化論的存在論）と便宜的に呼ぶことにする。

- 存在論が形而上学の課題として伝統的西洋哲学の研究項目に位置するのは、古代ギリシャ自然哲学概念、アリストテレスの「質料」概念からで、その概念をめぐって自然哲学は展開される。その課題は、17世紀になって、デカルトをはじめ当時の自然哲学の対象としても継承される。
- つまり、このドイツ観念論における形而上学的存在論の再解釈課題を取りまとめる時代までは、存在論は形而上学の課題であった。その特徴は、アリストテレスの質料、デカルトの自然哲学の物質概念、つまり延長と様態に関する概念、カントの物理的単子論の探求であり、哲学の一分野としての自然学の基本的課題として存在論は位置づけられていた。
- しかし、形而上学的存在論は天文観測者カント以後、哲学者と科学者の分業化によって、哲学者の職務から解放され、より専門的な科学主義的存在論者に委託されることになる。こうして哲学から存在論が分離される時代、ある意味で、哲学的存在論の危機を予感し、新たに哲学的存在論を打ち立てるための現代哲学的存在論の前哨段階理論を提案したのがニコライ・ハルトマンであったと考えられる。哲学の課題から自然学が解任されたとき、形而上学的存在論はその役割を失う事になる。自然的実在存在に関する議論は物理科学を代表とする自然科学の課題に委託され、その存在論の言及の方法は、実証性を前提とした数学や化学記号による理論表現であった。科学主義の台等によって、形而上学的存在論は哲学の課題から歴史哲学の研究対象に移される。
- ニコライ・ハルトマンを含め、その展開者であるハイデガーにおける存在概念から、現代哲学の存在論は出発すると考えられる。この段階を実存的存在論もしくは現象学的解釈の存在論と言うことにする。この段階では人間存在が哲学的存在論の課題となる。主体の課題として存在が問題になった時、存在者という対象的存在と現存在という主体的存在が分離する。つまり、哲学は自然的な対象化された存在として人間を見るのではなく、それは存在者としての現存在にとっての対象化された存在としての人間であるが、哲学的存在とは「いまここに居る現存在である」と帰結してゆく。
- 人間の実在が存在論の課題となると、志向性が存在論の課題になる。存在様式を定立する主観的な側面の働きとして「存在定立」という概念が導入され、志向作用の本質的構成の発生は形成過程を分析することになる。存在は、ハイデガーによると、時間的に現存在を投企もしくは反省する定立的な信念的性格（ノエシス）と時間的に現存在の状態的な形態を維持する存在様態的な性格（ノエマ）に分類されることになる。
- 存在定立の概念の導入によって展開される現象学的存在論は、自然学の基礎論である形而上学的存在論に批判的解体を前提にして成立している。つまり、現象学的存在論には、現存在の対象存在との関係の中である志向性をもって関わる姿、つまり現存在の生きる意思や欲望を前提にして関係する対象存在の理解や了解のあり方が問題にされる。つまり、存在はそこにあるものではなく現存在に関係するものであり、ハイデガーによれば、現存在の投企として了解されたものであるという解

積が成立しているのである。その意味で、現象学的存在論は現存在の了解（言語時間的形態）を前提にして成立している。このことを、存在了解と呼んでいる。

- 伝統的な存在論は自然存在を知りうる人間がおり、その自然存在の認識として存在論が成立していた。しかし、現象学的存在論では、存在者と了解し、その上でそこから投企する現存在を前提とした存在論が登場している。つまり、了解という主体、現存在の行為が存在者の了解事項の前提条件となる。すると、存在定立の概念から展開する現象学的存在論は、伝統的な認識論を前提にした存在論の書き換えをしたのではないかと思われる。
- 何故なら、伝統的西洋哲学では、質料の解明、根本的な実体をもって存在するものは何かという課題に取り組む存在論と、形相の解明、その存在するものの人間的認識のあり方を検討する認識論の二つの柱がある。その存在論は、個別科学のメタ理論であり、一般形而上学である。しかし、認識論は、その意味で、メタ理論ではなく、伝統的哲学の中心ではなかった。が、しかし存在論が科学主義の中に組み込まれ、それまでに個別科学の元締めとして君臨していた形而上学的存在論に対して反乱を起こし、その権威を剥奪しようとしたとき、哲学は認識論をその伝統的哲学の権威として起用し、そのすべての学問の基盤であり基本であるという位置を守ろうとした。
- 言い換えると、形而下的存在論として考えられる個別科学の進歩によって物質世界の存在形態はより分析的に説明され、その説明によって、有効な技術利用やそれによる経済効果が生じる事になる。つまり、形而下的存在論は形而上的存在論よりもより多くの果実をもたらした知恵の樹の産物である。近代合理主義によって萌芽した科学的実証主義があらたな時代（資本主義）を切り開き、新たな文明、科学技術文明を拡張展開していくのである。その支配によって成立した科学技術の知の優性の主張に対して、哲学的思惟の優位性を主張するため、科学知のメタレベルに位置するであろう哲学的な知の存在を主張するのである。それが20世紀に哲学研究の主題となる認識論である。認識論が哲学の中で脚光を浴びたのは、科学知の台頭、科学技術文明の始まりに対して、新たな哲学的ドグマを主張するための哲学からの科学への反撃であったと理解できる。
- その意味で、現象学的存在論も、この伝統的西洋哲学、形而上学の解体と抵抗の歴史的な流れの影響を受けながら、認識論的な課題を独自の存在論の中に織り込む事になる。しかし、現象学は「何を知るか」という伝統的認識論的課題を現象学的存在論に混入させないために、「どのように知るか」という知の志向性や意志行為を前提にして存在論を語ることになる。そこに存在定立の概念が発明された。しかし、問題は、現存在の志向性を前提とした存在者と存在者の、ハイデガー以来の問題である。
- そこで、メルロ＝ポンティは、この問題に対して、「ところで現象学は、真なる知の導入にすぎないのか、それとも全体として哲学のうちに踏みとどまるかのどちらかである。真なる知の導入とし

での現象学は、経験のさまざまな冒険とは無縁なままである。また哲学のうちに踏みとどまった現象学は、「存在はある」という前弁証法的な定式でかたをつけることはできず、存在についての省察をみずから始める必要がある。ここで準備しようとしているのは、現象学を歴史の形而上学に発展させることである。」（中山元 1999.5）と問題を立て直すのである。

- フランス現象学の流れ、唯物論に解体していくメルロ＝ポンティやトラディク・タオの問題提起は、こうした問題提起の中で繰り返された現象学の実験であったといえる。現象学は、世界存在に対する現存在の反省行為の了解学であるのか。それとも新たな存在論を模索する体系学なのか。その問題は現在も議論されている。

主体性を含むシステム論の科学性の現象学的再構築

- しかし、時代は急激に知の再編を要求し続けた。哲学がその存在理由の最後の牙城にした認識論が、認知心理学、認知科学の発展によって、危機に瀕しているのである。認識を論じるのに哲学的な言及は必要なく、発達心理学、脳神経生理学、動物行動学等々によって、科学的に認識過程が分析、解明され、さらにその理論は教育学、経営学、臨床心理学、精神神経内科学、精密工学、ロボット工学、情報科学等に適用され、有効性を検証されるのである。その知の実践力に対して、哲学的認識論は、単なる思弁的解釈に留まる事になる。その知の有効性を検証する技術的な社会的な手段がないのである。その哲学的認識論が色あせることにより、哲学の存在理由が深刻に問われる事になる。哲学は、伝統的にその学問の基本課題である、存在論も認識論も、科学から奪い取られる事になり、哲学の危機は科学技術文明のパラダイムは、伝統的な形而上学的存在論や哲学的認識論の消滅を引き起こしながら登場することになる。
- 科学理論の時代的文化的要素、理論のメタレベルの構築概念が提案され、哲学は科学的思惟のメタ概念を課題にする科学哲学と、科学的知のドグマ的構造を批判する反省学的課題の分岐していく。前者の流れがクーンや吉田民人らの科学パラダイム論で、現代の科学哲学の流れとなる、後者は現象学の流れであり、この課題では、哲学は、科学的知のドグマに対する批判者として、つまり、科学技術文明の点検者として発展する道を選ぶ事になる。また、そのハイブリッド的な理論が、主体や自立性を課題にしたシステム論である。
- 主体を課題にしたシステム論は、それを正しく理解するために、システム論の中での理論的分岐点をもっと位置づけられる必要がある。第一段階は社会動態論的なシステム論で、その理論は行動主義の影響を受けたパーソンズによって提案されている。この理論からは社会的存在は自然的存在と同じくらい実在的存在として理解されている。グローバリゼーションによる多文化共生社会、国際化する環境問題、多国籍企業など企業活動など、社会システムがダイナミックに進化していくプロセスの有効な説明を求められるとき、この理論の破綻は生じるのである。こうした進化過程を前提に

してシステムを考える場合、生物系の自己組織系システムが社会学の中に適用されてくるのである。これが第二段階の自己組織系システム論を構築する。この理論は、工学分野にも波及し、現在のシステム論の標準的な理論的地平をなしていると考えられる。情報科学技術が進歩し、ロボットのよる判断技術の導入によって自動制御化された機械的知と人間的経験知のコンフリクトが生じる。幾つかの重大な事故を通じて、知的システムデザインを研究する工学分野からも、主体性もつシステムデザインが議論される。始めは、制御プログラムに主体機能を持たすという対象化された主体性というプログラム概念が、主体性は制御プログラム化し対象化することができないという認識に発展し、そのことを前提とした機械、人間、その双方間のインターフェイスエージェントを含めた三体関係のモデルを提案する事になる。こうした、工学分野でのシステム論の中で、主体が問題にされる時、これまでの現象学の議論は、それに何を語ることが出来るのだろうか。(三石博行 2001.11)

- システム論が主体問題に触れたとき、現象学の課題が復活するのである。その復活の契機は、哲学が科学に対して批判学であるということが一つ目の視点で、二つ目の視点は、現代科学的存在論から語られる主体の問題は、全て対象化された存在つまり対象化された主体的存在者であり、現存在として現象学が語った主体ではない。その現時的的存在や現空間的存在として提起された現主体と現対象の問題は、科学が主体を語れば語るほどに、浮き彫りになりその対象化された主体や世界との差異として突出してくるのである。ここで、再び、現象学は復活することになる。それは科学の批判者であるばかりでなく、科学の補助者として、科学技術文明の倒錯を是正するモラリストや常識人として、登場するのである。
- この段階で当然、気付くことは、存在論という用語の消滅と、システム論という新語の登場である。存在論の一形態がシステム論である。存在論は、今までに、質料、実体、物質の延長概念、単子論、物理単子論、実在論、形態論、運動論、分子論、原子論、素粒子論として議論されてきた。それらの自然学的存在論の収束点は、量子論での、質料の存在的延長概念である物質（粒子）と運動的延長概念であるエネルギー（波動）の統一的存在形態（シュレディンガーの波動力学）の言及である。
- 存在しているものは運動しているものであるという現代哲学の命題、もしくは志向性をもった認識運動（主体的に動くもの）として人間存在を理解した現象学的な存在論と直感的に共通する地平にたどり着くのである。その運動（エネルギー・様式機能関数）と存在（物質・素材構造関数）の統一的概念理解が、システム論の基本なのである。量子論が現代の物性理論となるように、システム論は現代の社会存在理論となるのである。その時、物質とエネルギーを統一的に語るシステム論はサイバネテックスの理論を構築したウインナーと自己組織系の情報理論を構築した吉田民人の概念である「物質、エネルギーを秩序、無秩序の次元から見た姿で、時間的、空間的、定性的、定量的なパターンをもつ、また、それらは伝達、変換、貯蓄が可能であり、量的にも測定可能である」も

のを情報と定義したのである。このウイナー吉田の情報概念の定義から、逆に、存在とは「時間的、空間的、定性的、定量的なパターンをもつ物質、エネルギーの秩序状態である」と言えるのである。その秩序状態の関係方程式は「時間的、空間的、定性的、定量的に測定可能な」状態のシステム形態を持つのであるといえる。

- さらに、このウイナー吉田の情報概念を前提にして考えられるシステム概念は、第一次プログラムの自己組織系（吉田民人 1967）と呼ばれる要素と要素間の関係関数（機能と構造）の生産再生過程のプログラムを持つ自生的自己組織性と、第二次プログラムの自己組織系（吉田民人 1967）と呼ばれるシステムの発生から消滅までの進化過程をプログラムに持つ発生的自己組織性の二つの自己組織運動をもつ存在論的なシステム論である。
- 吉田のシステム論（存在論）の中に、どのように主体問題が語られているのだろうか。吉田民人は、物質層、生物層と人間層の、三つの科学的構成概念の違いを前提にして、人間層の理解には物質層で成立している科学パラダイムを活用することは無理があると述べた。その例を挙げるために、人間層を課題にすると「実存」という人間固有の自由度の高い存在様式問題にしている。つまりその存在様式は「たえず・いま・ここ」という自由度の高い偶然性を前提にして成立する存在であることを自覚的に追及しなければならないと語っている。実存と呼ばれる現象学的な人間存在様式の理解を可能にする科学論が課題になると考えた（吉田民人 2005.11）。つまり、吉田の人間層のシステム存在論と生物層や物質層のシステム存在論は峻別する必要があるとし、その意味で、人間層では、実存の課題が科学的解明課題になる。つまり、必ずしも、主体は対象化され、例えばシステム論の対象となる主体ではない。それは、現象学が言う現存在に含まれた現主体と現対象の分離不能な状態を人間層の科学の対象にすることが可能であると述べた。

吉田民人のプログラム科学論から展開された進化論的存在論と存在論的構築主義

- 吉田民人の存在論は、科学理論のメタパラダイムを構成する科学哲学的基礎理論から展開されている。つまり、近代から現在までの科学理論の構築過程を分析すると、吉田によると、近代科学史に17世紀のニュートン力学の契機と、20世紀の分子遺伝学の契機と、二つのメタパラダイム変換の過程が存在する。科学理論の進化（パラダイム的な変換段階）によって、存在論は進化してきたと考えられている。その意味で、吉田存在論は自然学存在論ではなく、科学認識世界の解釈学的な存在論であるといえる。また、吉田民人にとって存在論は、プログラム科学論を展開する目的関数の解としての意味を持つ重要な課題であると理解できる。
- 吉田存在論を理解することは、吉田科学哲学の構築の仕方を検討しなければならない。吉田の科学論は17世紀の物理学形成の近代科学革命と20世紀の遺伝子学形成の現代科学革命を同レベルのメタパラダイムの変換過程として位置づけた。この解釈は、これまでの科学史研究や科学哲学研究で

はじめての解釈である。

- つまり、吉田民人は伝統的存在論者が拘り続けた「質料」的存在から世界を見たのではなく「形相」的存在から世界を観た。世界の物質的存在形態ではなく、情報的存在形態に注目した。そこで、これまでの科学哲学者は古典力学から現代物理学（量子力学や相対性理論）のパラダイム変化を重視してきた。それは古典力学において物質とエネルギーは同一概念ではなく、また観測問題でもその二つの物理世界は決定的に異なる概念から出来上がっていたからである。吉田の理論研究は、ウィナーの情報理論から始まるために、そもそも現代物理学的なパラダイムの前哨段階を、その理論的なバックグラウンドや前提にしていたといえる。統計力学や電磁気学を形成したマックスウェルから始まる情報エントロピーの概念は、物理学史の中でも、解析力学や統計物理学が完成し、量子論や相対性理論の土台が形成された時代に出来上がったものである。その為、吉田は物理学的な世界観に於いても、古典物理学の世界の呪縛が強く受けることはなかった。情報理論から始まる吉田理論社会学は、いわば、物理学を統計論や量子論から始め、生物学を遺伝子学や分子免疫学から始めたのと同じである。その理論社会学は、現代科学理論を前提にて、成立しているといえる。
- 現代の情の基盤概念である「形相」から存在を理解しようとする吉田の理論展開では、「質料」の法則性を前提にして展開した伝統的な自然学の物理運動的の解釈、つまり物質のエネルギー運動に関する科学（法則科学）と、「形相」の法則性を問題にした遺伝子のプログラム秩序から生み出される科学（法則科学）は峻別されることになる。二つは伝統的存在論から考えても、異なる存在要素を課題にした科学であると考えた。その二つの科学の間には、パラダイム変換過程がある。つまり、科学哲学的には、物理科学をモデルにした法則科学から「ゲノムの秩序」シグナル情報の秩序原理の科学へのメタパラダイムの変換が生じたと考えた。
- 吉田民人は理論社会学者である。いかに自然科学の理論を学ぼうと、自らの学問基盤は理論社会学（哲学と社会学）である。その理論関数の収斂する解は、社会文化人間に関する機能構造の解明であり、その世界の構築要素の合理的解明である。したがって、その課題は必然的にシンボル情報の秩序原理の科学へ、これまでの物理法則を土台にし形成されている情報科学の情報概念も、またシグナル情報によって形成している遺伝子プログラム科学の情報概念も、その最終目的の理論構築のための材料として、脱構築と再構築を繰り返し、吉田理論社会学を肥料となるのである。吉田理論社会学の構築のために、プログラム科学論という厳密で壮大な科学論的検証を吉田民人は行うことになる。
- ここでは、壮大な吉田科学哲学（新科学論）の構想を全て細部にわたって紹介し、またそこから派生してくるいろいろな理論展開の一つの課題として存在論について十分に紹介する紙面を時間が無い。そこで、この課題は、今後、論旨に引き継ぐのだが、ここでは、簡単に存在論に限定して述べ

る。

- 簡単に纏めると吉田の存在論は、「生成存在」と呼ばれる物質層の法則によって生成する存在と「シグナル性の構築存在」とよばれる生物層のシグナルプログラムによって設計・構築される存在と「シンボル性の構築存在」と呼ばれるシンボルプログラムの設計・人間層のシンボルプログラムによって設計・構築される存在の三つの形態が自然学的=進化論的存在論」である。(吉田民人 2005.11)
- また、存在者の三つの特性の相違を秩序原理の相違と考え、本質と構築という現象論的な課題を、改変不能な生成と改変可能なシグナル型構築とシンボル型構築を理論的、発生論的、起源論的という課題に変換することが出来る。つまり、構築されている二つの存在形態には、それぞれシグナルとシンボルの二つの異なるプログラム負荷がかかる。その構築要素は認知、評価、指令の三つのモードを持つ。その存在論は三つのモードを統合している。特に指令のモードを所有して構築されている存在論を「存在論的構築主義」と定義し、その指令のモードの構築を自覚しない、もっぱら認識モードが存在論を形成していると考えた「認識論的構築主義」と分別した。
- 存在論的構築主義の概念には、認知、評価、指令の三つのモードをもって成立している存在論が吉田の言う新科学論から帰結される存在論である。その存在論は、実践変革志向の指令モードを持つことになる。つまり、吉田民人のいう存在論的構築主義は、問題解決学や技能学が、科学として位置づけ可能になる理論的基盤を保障する考え方となると解釈できる。
- また、認識論的構築主義と入れ違いの概念として、プログラムの形成・存続・変容・崩壊にかんする説明、つまり被説明項としてのプログラムに関する課題を言及している。存在の説明項としてプログラム概念を用いながら、そのプログラム自身の再生的自己保存と進化的自己保存(プログラム保存則)やプログラムの可変可能性の規則(エントロピー増大則)等の規則性が、メタレベルのプログラムで存在していることを意味する。
- 吉田民人は、さらに、進化論的存在論や存在論的構築主義の新概念を打ちたてながら、主体性を現象学的な現存在論的課題に隠蔽し議論することを避け、他の人工物プログラム科学(文理横断型の科学論)の埒内に持ち込み、仮に対象化された主体に認知、評価、指令の三モードの構築概念を付与することによって、人間存在の認知、評価、指令のモードによって作り出されるフィードバックループ構造を前提にしたダイナミックなシステを持つ存在論を目指していると思われる。

参考文献・資料

(ハイデガー 1966) ハイデガー 「存在と時間」

(中山元 1999.5) 「個人の歴史と公共の歴史における「制度」メルロ＝ポンティ、ポリロゴス 25号

http://polylogos.org/mmp_25.html (1999年5月)

(吉田民人 1967.) 「情報科学の構想」

(吉田民人 2004.12) 「新科学論と存在論的構築主義」 『社会学評論』 2004.12

(吉田民人 2006.6) 「存在論的構築と自己組織化 —〈反法則科学〉の視界—」 第53回関東社会学会大会自由報告 配布論文 2006.6

(吉田民人 1996) 「近代科学のパラダイム・シフト —進化史的「情報」概念の構築と「プログラム科学」の提唱— 平成8年度学術研究総合調査報告書

(吉田民人 2003) 「新科学論の視座と哲学の視座 —経営哲学およびその方法的基盤をめぐって—」 経営哲学学会 『経営哲学とは何か』文眞堂、2003、

(吉田民人 2001.12) 「新しい学術体系」の必要性和可能性 『学術の動向』(日本学術会議広報誌)2001.12、

(吉田民人 2005.11)、「大文字の第二次科学革命—情報論的転回—」 国際システム研究会連合 基調報告、2005.11

(三石博行 2001.11) 「主体的反省機能を持つシステム論は可能か —自己準拠的システムから反省機能補助システムとしてのインターフェース・エージェントモデル—」 『社会・経済システム』20

(三石博行、2002) 「設計科学としての生活学の構築—プログラム科学としての生活学の構図に向けて—」 『金蘭短期大学研究誌』、第33号、2002

誤字脱字のあることをお詫びいたします。